

人文会 ニュース

jinbunkai news

December 2025

NO. 151

1
15分で読む

アメリカ独立250年

16
書店現場から

町の本屋ができること

22
図書館レポート

人やまちとつながる

「広場」のような図書館をめざして

2025年グループ訪問報告

上村 剛

長崎 健一

嘉賀 收司



www.jinbunkai.com

打越正行

石岡丈昇／上原健太郎／
上間陽子／岸政彦 解説

沖縄社会論 周縁と暴力

暴走族のパシリにはじまり、沖縄で調査を続けた。
『ヤンキーと地元』を書いた、伝説の
フィールドワーカーによる遺稿集。

●定価2970円

筑摩書房

※定価は10%税込です。
<https://www.chikumashobo.co.jp/>

ブックサービス ☎0120-29-9625(フリーコール)

現代誤情報学入門

ジョン・ルーゼンビーク他 著 加納安彦 訳
いま世界を席巻するフェイクニュースや陰謀論。
「誤情報」はなぜ広まってしまっているのか。第一線で活
躍する研究者が解き明かす。

●3400円



歩いて学ぶ都市経済学

中島賢太郎・手島健介・山崎潤一 著

日本各地の都市の何気ない風景の「なぜ」の背後に
あるメカニズムを経済学的に解説 最先端の知見
であなたの街歩きをナビゲート。

●2640円



日本評論社

☎03-3987-8621 (営業部)
<https://www.nippon.co.jp/>

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 表示価格は税込価格



思想の
地平線

ヘーゲル読解入門

『精神現象学』を読む (上・下)

時代の転換期にあらわれ、フランス思想の転換点
としての役割を果たした哲学者、コジエーヴによる
記念碑的講義の記録。白水Jブックスで待望の
復刊。

上妻精、今野雅方訳 ●各1760円

アレクサンドル・コジエーヴ

白水社

東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

村田優樹

ウクライナの形成

革命期ロシアの民族と自治



そもそも「ウクライナ」
という国家はいかに
成立したのか。ウクラ
イナをめぐる複雑な
過去を解き明かす。

3,960円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

アメリカ独立250年

先日、とあるアメリカ史研究者と話していたときのことである。なにげなく来年(2026年)が独立宣言から250年という話題になった際、「本当に250周年を祝えるのかな?」とぼそと呟かれた。専門家にして、どうなるかわからないという戸惑いが、とても印象的だった。私も、似たような戸惑いを持っているからである。

独立宣言を中核に、自由を目指して戦ったアメリカ独立の歴史。そのようなアメリカ史理解が適切かは、現在、意見が非常に割れているものである。近年の最も有名な批判としては、『1619年プロジェクト』がある。

アメリカ建国の年は何年か? こう聞かれると多くの人が1776年(もしくはパリ条約で独立が認められた1783年)と答えるだろう。だが、同著は1619年

上村 剛(関西学院大学准教授)

と答える。この年は、はじめてのちのアメリカ合衆国に記録上、「奴隷にされた人々」(奴隷(slavery))という、中立的に聞こえる言葉の使用も厭うが連行された年である。アメリカ合衆国のちの発展を支えたのは、南部のプランテーションなどで、人間扱いすらされずに過酷な労働に従事し、あるいはまた生命を落とした人たちである。その歴史的事実が不可視になっているのは、文字通り、1776年をピークとする、白人の白人による白人のための歴史が語られてきたからにほかならない。1619年はこのようにして、かなり強い異議申し立てとともに、既存のアメリカ史の解体を試みた。

このようなドラスティックな修正に対しては、多くの歴史家(リベラルな政治的なスタンスの学者も含む)から反論や批判が相次いでいる。例えば、「人種という社会

的に構築されたカテゴリーを時代錯誤的に持ち込んでいる」といった方法的な問題の指摘から、そもそも1619年の「奴隷にされた人々」は奴隷とは言えない存在だった、1619年以前にも奴隷の記録は確認されている、といった歴史学的な誤りの指摘に至るまで数多くあり、単純に1619年の主張を鵜呑みにするわけにはいかない。他方でまた、これまでのアメリカ史が人種的なヒエラルキーを内在化させて論じられてきたことは否定できない事実であり、どのようにしてより公正な歴史叙述が可能なのか(そもそもそこでいう公正とはどのような意味も含めて)は、今後の歴史学者の課題である。

もちろんこのような歴史をめぐる論争は、現在のアメリカ政治をめぐる対立と不可分である。BLM運動や、多様性を是とするリベラルな政治的イデオロギーと、それに反発する保守的なイデオロギーとの感情的な分極化のなかで、これまでの歴史をどのように理解するかという「歴史戦」が展開されている、ということである。非白人の歴史を公正に描くという、歴史学的な展開の推進が一方にあり、他方に、これを嘲笑うかのように、ドナルド・トランプ大統領のバックラッシュがある。

1776年から250年を記念して、彼の肖像が刻印されたコインを作るという案もあるようだ(<https://www.cnn.co.jp/business/3523804.html> : 最終閲覧日、2025年10月23日。建国者たちの肖像ならいざしらず、どうして自身の肖像なのかはにわかに理解し難いが)。

アメリカが英本国から独立したこと、そのなかでも特に1776年は「建国神話」と(揶揄も含めて)呼ばれるくらいには、多くのアメリカ人の精神的支柱である。自由の精神こそ、自分たちのアイデンティティであり、アメリカという理念を体現したもの、と捉えられている。だからこそ、1776年を揺さぶり解体しようとすることは、それなりに多くのアメリカ人にとって、容易には受け入れ難い、危険な価値観なのである。

このようにして、現在進行形で、神話化と神話破壊の綱引きが行われているのがアメリカ独立という出来事である。そのような苛烈な現状において、太平洋の向こう岸から我々ができるのは、神話化と神話破壊のあいだで、複数の視点から歴史的な展開を追いかけることだろう。そこで本稿では、今日の視点からみて、どのように独立宣言250周年を考えればよいのかを論じたい。

独立宣言とはどのような文書か

第一に考えるべきは、250周年を迎える独立宣言自体をどのように理解すればよいか、である。

独立宣言といえば、アメリカ革命を代表する古典的な文章である。特に次の一節は、アメリカでは暗誦している人も多い。

我々は、次の真理は自明なものと信じている。すなわち、人はすべて平等に造られている。人はすべてその創造主によって、誰にも譲ることのできない一定の権利を与えられており、その権利の中には、生命、自由そして幸福の追求が含まれている。これらの権利を確保するために、人々の間に政府が設立されるのであって、政府の権力はそれに被治者が同意を与える時にのみ正当とされる。

従来の政治思想に代わって、身分制を否定して、人の生まれつきの平等を高らかに謳う。この権利は不可譲で

あり、もしも政府が暴政によってこの権利を奪おうとするならば、不当である。このような、極めて近代的な政治原理を打ち出したことで、よく知られている。

しかし独立宣言が同時に、極めて政治的な文書であることは、論をまたない。1764年の砂糖法、1765年の印紙法から1773年の茶法にいたるまで、10年以上のあいだアメリカ植民地は英本国の課税に抵抗し続けたのであり、1775年のレキシントン・コンコードでの争いから、実際の戦闘も勃発している。その最中に発した文書は、誰に向けた、どのような文書なのか、どのような意図を持っていたのか、といった性格をもう少し慎重に考える必要があるだろう。

まず問題になるのが、誰に向けた文書なのか、という点である。パッと思いつくのは英本国に向けて、ということになるかもしれないが、さほど簡単ではない。直接の名宛人として出てくるような表現は、以下のものである。「地上各国の間にあつて(……)主張しなければならなくなる場合がある」、「公正な世界に向けて」、「世界の最高審判者に訴え」といったものである。つまり、名宛人は、世界中の他の諸国に向けてである、と考えられる。

言い換えれば、独立宣言は国際法的な文書なのである。英本国と植民地とのあいだに紛争が生じている。この解決策として分離を主張する。これが正当な主張であることを、他の国々に向けて訴えているのである。

これは独立宣言の構造にも表れている。独立宣言は、五つのパートから構成されている。①第一の前提「分離の理由を我々が表明する」という立場の宣明、②第二の前提「生まれつきの権利のリストがあり、その権利がある政府に侵害された場合には当該政府を倒さなくてはならない」という政治原理の確認、③英本国の国王ジョージ3世による、長年の、圧倒的多数にわたる権利侵害の列挙、④それに対するアメリカ植民地の行動は正当であるという主張、⑤結論「分離せざるを得ず、独立した国家になることを、我々は相互に誓う」というものである。以上のように、独立宣言は、本国からの離脱についての、他国に向けた正当化言説である。それだけを読めば、声に出して読みたくなるような、美しい政治思想の発露である。だが反対に、独立宣言には表れてこない不都合な事実にも、我々は目を向ける必要がある。当然ながら、植民地の内部にひそむ社会的なひずみ、そして矛盾のよ

うなものについてこの宣言は述べていない。自らの正当性について述べるときにむざむざ欠点を指摘する必要はないのだから、これは当たり前である。

植民地内部のひずみとは何か。例えば第二代大統領ジョン・アダムズの妻、アビゲイル・アダムズは独立宣言数ヶ月前の1776年3月31日に、以下のように夫に書簡を送っている。

女性を思い出すようお願いします。(……)無制限の権力を男性たちの手に置かないように。やろうと思えば男性たちはみな暴君になるかもしれないことを、思い出してください。もし配慮や注意が女性に払われないのであれば、私たちは反乱を扇動するように決心し、投票権、つまり私たちが代表を持たないまま定められたすべての法に従わないようにします。

この時代、他の多くの地域の政治がそうであったように、女性には政治から排除されていた。それだけではない。このアビゲイル・アダムズのような、抗議する女性の声も無視され、アメリカ独立を構成する重要な政治思想と

して描かれてこなかった。

もう一つのひずみは、当然ながら、奴隷制の問題である。「人はすべて平等に造られている」という文書を採用、署名した建国者のうち、いったいどれくらいの人が、黒人奴隷や先住民奴隷を考慮していただろうか。彼らはそもそも「人間」扱いされていなかったのではないだろうか。ちなみに、英本国から似たような反論は、アメリカ植民地に向けて行われていたことから、彼らが気づけなかった、ということはあるにない。何より、当初ジェファソンが独立宣言を起草した際には、奴隷制を非難する文言が入っていたのだが、それが最終稿では削除された、という事実が、独立宣言の生成過程から明らかになっている。意図的に建国者たちは、黒人奴隷の問題を無視したのである。

このように、他国に向けた離脱正当化の言説として独立宣言を捉えると、そこから抜け落ちている不都合な事実にも目配りすることができるようになる。たしかに独立宣言自体は、自らの権利を擁護するために書かれた、美しい文章である。だが同時にそこには、その文章を読んだのみではみえてこないような、別の事実も潜んでいる。

るのである。複眼的な1776年理解が必要とされるゆえんだ。

新たな国家はどのように作られるべきか…成文憲法と対立の制度化

独立宣言を読むだけでは表れてこない、アメリカ革命のとても重要なモーメントは、もう一つある。それは、新たな国家をどのように建設するべきか、どのような政治制度を構築するべきか、という問題だ。

昨年、筆者が『アメリカ革命』を上梓した際、よくみられた反応の一つは、タイトルについての疑問だった。「アメリカ革命」という言葉遣いは、あまり多くはみられない。斎藤眞『アメリカ革命史研究』なども既にあるが、一般的にはアメリカ独立革命、アメリカ建国などといった言葉で表現されることが多いようである。それゆえ、「アメリカ革命」というタイトルは多くの読者に違和感を持たれたようである。

「アメリカ革命」という語に筆者が込めた思いは三つある。

一つ目は極めて単純なもので、英語表現の逐語訳を

した、というものである。英語では American Revolution という表現はごく一般的であり、それを日本語に訳せば、もちろんアメリカ革命、となる。それだけの話である。近年のアメリカ史の教科書でもアメリカ革命という呼び名は増えている(例として、鰐淵秀一「アメリカ革命」はじめて学ぶアメリカの歴史と文化』)。

二つ目は、もう少し難しいものである。それは、「革命」という言葉に込められた独特の言説の磁場を乗り越える、というものである。

20世紀の長い期間、アメリカ革命という用語の使用には、その妥当性も含めて是非があったと思われる。いわゆるマルクス主義的な歴史観からすれば、ある歴史的な動乱を革命と呼べるか否かは、大問題だったからである。その意味で、アメリカ革命は「市民(ブルジョワ)革命」と呼べるかどうかという観点から、「革命」という用語を用いるか否かをめぐって慎重な用語法が必要とされたところ、現代の歴史学からはブルジョワ革命論は既に有力ではない議論となっており、その意味で、アメリカ独立を革命と呼べるかどうかを、新たな議論の前提として構築するべきではないかという考えもあった。

では20世紀の「革命か否か」論争に踏み込むことなしに、アメリカが革命であると言うとき、どのような肯定的な用語理解が可能なのか。それを考えるために、「アメリカ革命」の三番目の意味合いが見出される。それが、西洋政治思想史における革命概念を、アメリカに援用するものである。

西洋政治思想史における革命とは、独特な意味をともなっている。これはハンナ・アーレントが『革命について』で論じたアメリカ革命論、フランス革命論との関係で重要な論点である。アーレントは、そもそも革命にあたる用語は思想的には「復古」を意味している、と論じた。どこか帰るべき過去の重要なポイントがあり、そこに原点回帰する、というようなイメージで考えられている。その意味で、例えばトマス・ペインのような革命を扇動した人物においても、意識としては決して革命的ではなかった、というように論じられている。

だが、アメリカ建国者たちの革命という言葉遣いをさまざまにみると、アーレントの理解は不適切であるように思われる。彼らが復古ではなく、何らかの「始まり」を意味して革命という用語を使っていたからである

（これは近年のデータベースの充実によって簡単に用語検索がしやすくなったことから生じている）。とすれば、革命という用語は、厳密な定義問題に踏み入るのでなければ、多くの場合には新しく何かを始めることを意味するだろう。

このようにアーレント的な思考様式、あるいはある種の西洋政治思想史の思考様式に則ると、アメリカ革命という用語には、次の問いが付随する。それは、アメリカ革命が革命だったと言えるならば、それは何の革命だったのか。何の始まりだったのか、というものである。

ここで、アメリカ革命が成し遂げたことのひとつとして強調されるのが、彼らが成文憲法を作った、というものである。これはそれ以前にはほとんど類例のない政治的営為であり、なおかつ、現在も運用されていることから、アメリカという国家の250年の歴史と一心同体と言っている存在感を放っている。憲法(Constitution)とは国の根本的なしくみ(constitution)を意味するからである。

では、連邦憲法は何が優れていたのか。それは、政治につきものの価値の対立を、あらかじめ制度化しておいたという点である。人間が人間である限り、複数の価値

観を持っている。ゆえに、価値対立は人間に不可避である（避けるのが可能だとしたら、脅迫や命令や洗脳くらいしかない）。

不可避であるとしても、そのままにしておけば、政治が闘争的である以上、いつかきな臭い内戦が生じかねない。アメリカは英本国との内戦によって相当のダメージを負ったわけだから、その恐怖は十全にあった。さらには、一人の権力者に暴政をしかれること、さらには議会が一体となって人々に課税をしてくること、これらの恐怖も十分すぎるほどに理解できた（英本国の議会の法律によって彼らは課税を強制されたのだから）。

君主や議会の暴政と、内戦やアナキー状態の現出とのあいだで彼らが見出した解決策、それは複数の権力を分け、それらの権力同士を政治制度内で衝突させることだった。対立の制度化である。そうすれば、いくら価値観が異なる同士であっても、争うポイント、ルールが設定されており、それを超えて争う必要がなくなる。例えて言うなら、スポーツのルール設定のようなものである。いくら三振に打ち取られても、ホームランを打たれても、それで相手に身体的攻撃を与えようという野球選手はい

ないだろう(それでもたまに乱闘や故意死球は生じるが)。そのようにして、内戦を防ごうと工夫した、と解釈できる。

理想の政治体制をめぐる革新と不満

具体的には連邦憲法では、大統領(執行権)のちの行政権)、連邦議会(立法権)、連邦最高裁判所(司法権)のあいだの三権分立があり、そして政党同士の争いものちに加わった。これは画期的だった。というのも、それまでの理想の政治体制は、英本国のように混合政体をとるか、君主政をとるかが基本的な思考線だったからである。混合政体とは国王、貴族、平民の三つの身分が議会の三部分を構成し、対等な関係で均衡をはかることである。これはギリシア、ローマの古典古代からの理想の政治体制の伝統を継承するものだった。あるいは君主政を機能させるという発想もまた、当時のヨーロッパでよくみられた政治思想だった(啓蒙専制君主などを思い出してほしい)。

このような政治思想の伝統に代わってアメリカ合衆国は、新たな政治思想の伝統を創出した。それは、三権分立、大統領制、違憲立法審査(司法審査)といった考え方

に現れている。いまでは私たちのよく知るこれらの政治的な常識は、アメリカ革命によって生み出されたものだった。理想の政治体制をめぐる革新(イノベーション)を多々起こし、それを連邦憲法に書き込み、制度化した。解釈の違いこそ残るものの、目にみえる文書として活字化したのも重要だ。誰がどのような権力を持っているか、そしてどのようなかたちで制度に則って争うかが明示化された、ということの意味したからである。

もっとも、このようなしくみは直ちに評価されたわけではない。新たにできた連邦国家に対しては、誰もが不満をいだいた。それぞれの植民地(独立後の州)には、故郷であり、また既にそれなりの時間が経過していたため、愛着を持つことができた。それに対して、いきなり新しくできたアメリカ合衆国なる国家は、愛着を持つにはあまりに抽象的すぎた。また多くの政治家が連邦憲法制定会議(12の州の政治家が集まり、1787年5～9月にフィラデルフィアで開催)でそれぞれの州を代表して議論したため、出来上がった憲法は誰しも不満を持つものになった。当初は第二回憲法制定会議の開催を主張する声もあった。ところが彼らは、徐々に連邦憲法を聖典化していく。

フランス革命が1789年に生じ、ヨーロッパ中が戦争に巻き込まれた余波で、1790年代にはアメリカでもさまざまな政治的対立が顕在化した。最も有名なものはハミルトンとジェファソンとの対立だが、これは新生国家アメリカを瓦解させかねないものだった。そこで彼らは新しくできた連邦憲法に従うことにした。「連邦憲法にはこのように書かれている」と、自らの政治的主張の論拠に憲法を使うことで、政敵を言葉によって打倒しようとした。その結果、二つの党派がともに政治闘争の舞台を連邦憲法解釈によって行うことになった。これとときに無自覚的な選択だったが、意図せざる帰結として、連邦憲法のステータスが格段に向上した。そのようにして、現在まで連邦憲法は（修正をともないつも）存続したのである。このような憲法政治の過程と結果こそが、アメリカが真に革命を起こしたと言える理由だろう。

アメリカ革命の語られ方

突如として新しくできたアメリカ合衆国をどう理解するか、すなわちアメリカ革命をどのように理解するかは、

その後一貫して多くの思想家、歴史家の関心を引いてきた。それゆえ、アメリカ革命の理解には、それぞれの時代の特徴が刻印されている。

最も早くには、デモクラシーを理解するための例として、いち早くヨーロッパに受容された。アレクシ・ド・トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』である。1831年から32年にかけて合衆国に滞在した若きフランス人トクヴィルにとって、アメリカはデモクラシーを理解するための格好の材料だった。デモクラシーはアメリカに固有のものにもみえるが、ヨーロッパにも不可避に到来しつつあるものである。それではヨーロッパはいかにしてデモクラシーを取り入れ、機能させることができるのか。デモクラシーに固有の危険は何か。そのような問題関心から、アメリカ合衆国という新しい国家はトクヴィルにヒントを与えた。その鍵は、習俗、すなわち無意識の民主的な慣行だった。自分たちのことは自分たちでやるという自治の精神がデモクラシーを築く主要な要因だと彼は観察したのである。

トクヴィルのような、アメリカの自由とデモクラシーをことうぐ言説は、20世紀に劇的に復活した。第二次世

界大戦後、ソ連との冷戦が激化するなか、アメリカ人は自分たちの歴史が、建国以来つねに自由主義の擁護にあった、と歴史を理解した。最も有名な例は、最新新訳が登場した、ルイ・ハーツの『アメリカにおけるリベラルな伝統』である。彼はアメリカという国家、そしてアメリカ人が一貫して大事にしてきた価値は自由であるとして、「コンセンサス・ヒストリー」を提唱した。アメリカ人が皆同意できるかたちでアメリカ独立を理解できるように描くことで、アメリカという国家の一体性を高め、ソ連との対抗図式を歴史学的に作ったのである。トクヴィルは長らくアメリカ人にとって忘れられていたテクストだったが、この頃から古典としてのリヴァイアサルが始まった。これはアメリカ史をどのようにみるかという現代的関心が、過去の思想の再評価につながる、格好の例である。

もちろんこのようなハーツの理解（やトクヴィルの自由主義的な理解）はいまでは否定されている面も多い。1960年代になると、バーナード・ベイリンとゴードン・S・ウッドという二人の歴史家が、古典古代の共和政を称揚する考え方、すなわち共和主義を中心にアメ

リカ革命を理解する新たな解釈を打ち出した。その中核概念は、徳である。アメリカの建国者の独立を推進する原動力となったのは、英本国で18世紀に流行した共和主義的な言説だった、と彼らは論じた。自らの祖国に対して、徳をもって参加し、武器を持って立ち上がるという言葉がイデオロギー的に蔓延していたからこそ、彼らは独立に踏み切ったという解釈である。

この20年ほど流行しているアメリカ建国解釈は、アメリカの複数性と帝国性に着眼するものである。前者は先に論じたように、アメリカ内部の人種の多様性と、そのような人種的ヒエラルキーがどのようにして構築されてきたかを問うものである。白人中心の歴史観で忘れられてきた（あるいは無視されてきた）存在として黒人奴隷がいたことは本稿冒頭でも述べたが、ほかにもアメリカ独立に反対した白人（ロイヤリスト）やカリブ海諸地域との関係、イギリス系以外の入植者（スペイン、フランス、オランダなど）、そして先住民の存在が改めてクローズアップされている。そのなかで英本国とアメリカ植民地との対立を描くだけではなく、より複雑で、より重層的な彼らの関係を精密に描こうとする研究が増加している。

それとの関連で、アメリカを帝国として描く研究も増えた。これは二つの原因から成っている。一つは、イギリスを帝国として描くことによってアメリカ植民地を理解する帝国史研究の勃興である。この流行の端緒は1990年代に求められよう。それと時代を同じくして、冷戦崩壊後のアメリカの覇権国家化という事態が進行了した。湾岸戦争、コソヴォ空爆、9・11からイラク戦争にいたるまでのアメリカの外交・軍事政策に対する批判のなかで、その道具として用いられたのが帝国という言葉だった。これは20世紀末から21世紀初頭のアメリカ合衆国が例外的に帝国なのかどうかという問いへとつながり、その起源を探るといふ動機から、歴史学的な関心へと移行した。アメリカがいつどこで道を誤り帝国主義的に振る舞うようになったのか。そもそも最初からアメリカは帝国だったのではないか。そのような問題が問われるようになったため、アメリカ革命史においても、他のアクターとの政治外交的な関係や、とりわけ先住民に対するジェノサイドと言ってもよい熾烈な政策の内実が改めて検討されている。先住民による先住民のための歴史研究が増加しているのは、そのためである。これらの

歴史研究の蓄積の結果、アメリカ革命とは「自由を求めて戦った男たちの血と涙のサクセスストーリー」などではなく、「先住民や黒人奴隷を抑圧して帝国の強大化をはかろうとした暴虐なストーリー」として理解するほうが適切なのではないか、との見解まで提示可能になった。本稿冒頭で述べた『1619年プロジェクト』のようなドラスティックな歴史修正が登場したのは、その結果である。これが250年を迎えようとしているアメリカ革命史の現在ということになる。

重要なのは、アメリカの独立、アメリカの革命をめぐる理解は決して固定的なわけではなく、それを記述する後世の人間の問題関心が不可避に反映され、変更される、ということである。「アメリカ革命とはいったいなんだったのか」。この問いは、歴史を鏡として、アメリカの自由主義や帝国といった現実を理解したい、そのような我々の眼差しと分けては考えられないものなのである。

そうであるならば、アメリカ革命理解を考える前に、まずもって現代の私たちについて考える必要がある、と言える。アメリカ革命を理解したい私たちはどのような

存在か。どのようなアメリカの現状、日本の現状を問題視しているのか。そのように自分たちの歴史への眼差し自体を前景化し、自覚する。そうしてはじめて、アメリカ独立の歴史理解は、現在のアメリカ政治に対しても、そして日本国憲法を中核とした、日本の政治的なしぐみ（constitution）に対しても、大きな示唆を与えることだろう。

上村 剛（かみむら つよし）

1988年東京都生まれ。東京大学法学部卒業、同大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士（法学）。日本学術振興会特別研究員（PD）を経て、関西学院大学法学部准教授。専門は西洋政治思想史、18世紀の英米思想史。著書『権力分立論の誕生——ブリテン帝国の『法の精神』受容』（岩波書店、2021年サントリー学芸賞（思想・歴史部門））、『アメリカ革命——独立戦争から憲法制定、民主主義の拡大まで』（中公新書）。共編著『歴史を書くとはどういうことか——初期近代ヨーロッパの歴史叙述』（勤草書房）。共著『戦後日本の学知と想像力』（吉田書店）、『政治哲学者は何を考えているのか？——メソドロジーをめぐる対話』（勤草書房）、『戦後日本と政治学史——古典をめぐる十の対話』（白水社）。

15分で読む アメリカ独立250年 ブックガイド

アメリカ革命期に書かれた古典文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
東京大学出版会	4130250429	史料で読む アメリカ文化史 2——独立から南北戦争まで 1770年代-1850年代	荒このみ編	品切れ	2005
岩波文庫	4003410615	コモン・センス 他三篇	トーマス・ペイン 著、小松春雄訳	720	1976
岩波文庫	4003230114	フランクリン自伝	フランクリン著、松本慎一・西川正身訳	1050	1957
岩波文庫	4003402412	ザ・フェデラリスト	A. ハミルトン、J. ジェイ、J. マディソン著／齋藤眞・中野勝郎訳	1160	1999
岩波文庫	4003401118	ヴァージニア覚え書	T. ジェファソン著、中屋健一訳	品切れ	1972

アメリカ革命期についての文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
ミネルヴァ書房	4623062072	独立宣言の世界史	デイヴィッド・アーミテージ著、平田雅博・岩井淳・菅原秀二・細川道久訳	品切れ	2012
中公文庫	4122050198	世界の歴史21 アメリカとフランスの革命	五十嵐武士・福井憲彦	1524	2008
岩波書店	4000220880	アメリカ独立革命	ゴードン S. ウッド 著、中野勝郎訳	品切れ	2016
慶應義塾大学出版会	4766417722	ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる	ゴードン S. ウッド 著、池田年穂・金井光太郎・肥後本芳男訳	品切れ	2010
中公新書	4121028174	アメリカ革命——独立戦争から憲法制定、民主主義の拡大まで	上村剛	980	2024
東京大学出版会	4130360715	アメリカ革命史研究——自由と統合	齋藤眞	7500	1992
ミネルヴァ書房	4623094059	はじめて学ぶアメリカの歴史と文化	鰐淵秀一	3500	2023
山川出版社	4634350601	ワシントン——共和国の最初の大統領(世界史リブレット人 060)	中野勝郎	800	2022

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
彩流社	4779115998	世界を新たに フランクリンとジェファソン—アメリカ建国者の才覚と暖昧さ	バーナード・ベイリン著、大西直樹・大野ロベルト訳	2300	2010
岩波新書	4004317708	植民地から建国へ——19世紀初頭まで(シリーズ アメリカ合衆国史①)	和田光弘	840	2019
彩流社	4779122415	アメリカ帝国の胎動——ヨーロッパ国際秩序とアメリカの独立	イリジャ H. グールド著、森丈夫監訳	3800	2016

アメリカ革命以前(植民地期)についての文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
慶應義塾大学出版会	4766420142	幸福の追求——イギリス領植民地期アメリカの社会史	ジャック P. グリーン著、大森雄太郎訳	品切れ	2013
ミネルヴァ書房	4623089918	先住民 vs. 帝国 興亡のアメリカ史——北米大陸をめぐるグローバル・ヒストリー	アラン・テイラー著、橋川健竜訳	2800	2020
新潮選書	4106038600	不寛容論——アメリカが生んだ「共存」の哲学	森本あんり	1800	2020

アメリカの通史のなかで革命期に言及する文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
ミネルヴァ書房	4623097715	アメリカ帝国——グローバル・ヒストリー(上)	A. G. ホブキンズ著、菅英輝・森丈夫・中嶋啓雄・上英明訳	6000	2025
名古屋大学出版会	4815811990	帝国の隠し方——大アメリカ合衆国の歴史	ダニエル・イマヴァール著、和田光弘監訳	5400	2025
名古屋大学出版会	4815805777	アトランティック・ヒストリー	バーナード・ベイリン著、和田光弘・森丈夫訳	2800	2007
紀伊國屋書店	4314011952	綿の帝国——グローバル資本主義はいかに生まれたか	スヴェン・ベッカート著、鬼澤忍・佐藤絵里訳	4500	2022
小鳥遊書房	4867800102	改革が作ったアメリカ——初期アメリカ研究の展開	佐久間みかよ・橋川健竜・増井志津代・小倉いずみ編著	3400	2023
明石書店	4750326405	アメリカの奴隷制と黒人——五世代にわたる捕囚の歴史	アイラ・バーリン著、落合明子・大類久恵・小原豊志訳	6500	2007

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
ちくま学芸文庫	4480510648	アメリカを作った思想—— 五〇〇年の歴史	ジェニファー・ラト ナー＝ローゼン ハーゲン著、入江 哲朗訳	1300	2021

19世紀～21世紀に書かれた、研究史上重要な文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
岩波文庫	上4003400920 下4003400937	アメリカのデモクラシー 第一巻(上・下)	トクヴィル著、松本 礼二訳	上1050 下1300	2005
岩波文庫	上4003400944 下4003400951	アメリカのデモクラシー 第二巻(上・下)	トクヴィル、松本礼 二訳	上910 下980	2008
ちくま学芸文庫	4480082145	革命について	ハンナ・アーレント 著、志水速雄訳	1600	1995
岩波文庫	4003403815	アメリカにおけるリベラル な伝統	ルイ・ハーツ著、西 崎文子訳	1500	2025
平凡社ライブラリー	4582760897	アメリカとは何か	斎藤眞	品切れ	1995
白水社	4560091739	1619年プロジェクト——ア メリカの黒人差別の歴史 (上)	ニコール・ハナ＝ ジョーンズ編著、 森本奈理訳	3800	2025

町の本屋ができること

長崎 健一（株式会社長崎書店 代表取締役）

本年6月、経済産業省が「書店活性化プラン」を公表した。

資料内では、国内における書店の窮状に触れられるとともに、地域における書店の存在は「国力の源」とも記され、国策としての書店振興スタンスが示された点で、まさに画期的なことだと感じている。

この成果を得るまでに、長年にわたり地道な活動を続けてこられた業界諸氏には心より感謝と敬意を表したい。

しかしながら、規模の大小を問わず、書店経営を取り巻く環境は厳しさを増す一方である。

私が本年より代表理事を務める熊本県書店商業組合においても、1988年に160あった組合店舗数は、2025年8月時点で43店舗にまで減少した。

経営的な判断によって店売りをやめて外商のみとする組合店の割合が増えていることを考えると、実店舗を構える出版流通のタッチポイントとしての「町の本屋」の減少速度はまさに加速度的といえる。

その大きな要因とされる雑誌販売額の急激な減少と、電子書籍シェアの拡大による紙版コミッ

クスの売上規模の縮小は、町の本屋の経営を土台から崩壊させている。

そのような中で2024年11月1日～2025年1月15日の期間中、当組合では全国初となる「プレミアム付き図書券」事業を実施した。

こちらは1枚1300円のお買い物ができる「プレミアム付き図書券」を、1000円で購入できるというもの。

実施に際しては「熊本県商店街等売上回復支援事業費補助金」という県の制度を活用し、プレミアム分30%に相当する約200万円の補助金を受けることができた。

本来、同様の制度は熊本県下の商店街におけるプレミアム商品券向けだと認識していたが、当組合の前理事長が確認したところ、同業組合での活用も可能であることがわかった。

組合事務局が煩雑な手続きをやり遂げた結果、合計6600枚を発行でき、事前のプレスリリースも奏功して、ほぼすべての取扱店で2日以内に完売という盛況ぶり。

「プレミアムが付くとはいえ、利用が県内の組合参加店に限定され、かつ2か月半という期間で、それほど需要があるだろうか」という、当初の不安は全くの杞憂となった。

出版不況、本離れといわれて久しい。

しかしながら、地元の本屋で紙の本を買うことへの確かなニーズが潜在することを実感できたことは、何よりの励みとなったし、参加店からも概ね好評を得た。

そして2025年に企画した第2弾では発行枚数を1万1000枚に増やし、組合参加店も前年比4店増の21店舗に伸びている。

また秋田・富山などの各県組合でも同様の事業実施が相次いでおり、書店活性化の一策として、広がりを持ち始めていることも心強く感じている。

このような補助金活用事業は法人格を有する組合でこそ実施が可能なもので、特定の書店が事業者単位では実現できないものでもある。

全国の書店組合における様々な創意工夫を学び、取り込み、地場書店の活性化に役立てていく所存である。

言わずもがな、個別の書店ごとの積極的な取り組み、経営改善もまた必須であろう。

本年8月中旬より、長崎書店では(株)ネブラスカが提供する無人営業スキーム「デジタルストア」を導入した。

これまでの有人営業時間(8時間)はそのままに、新たに朝・夜間の無人営業を4時間30分設定する「有人+無人のハイブリッド営業」の実現で、従来比1・5倍の営業時間拡大となった。

近年、東京をはじめとした大都市圏を中心に広がりつつある無人営業だが、当初は否定的な捉え方をしていた。

私のイメージでは地域に根差した書店とは、その店舗で働くスタッフの存在感あつてのものと強く信じていたからだ。

だが2024年に上京した折、懇意にしている取次社員の方のアテンドもあり、無人営業を導入している実証店舗を数店、視察する機会を得た。

視察店舗では、立地に則した商品構成・空間演出が考え抜かれ、多くの発見に恵まれた。

何より、一個人として新鮮かつ快適な買い物体験ができたことは、それまでの価値観を大きく転換する契機となった。

もちろん、無人営業ゆえの懸念（セキュリティ面など）は感じられたものの、システム提供会社・自動ドア等の設備業者・警備会社との協議を重ねることで課題解決を図り、導入に踏み切ることができた。

書店経営の持続可能性を高めるために「売上減少」「人手不足」など、事業者ごとに解決すべき課題は山積している。

当店においては、無人営業導入の主目的を「雇用を守る」ことにフォーカスした。

日々の仕入れ・企画・接客を担い、店舗の魅力と独自性を発揮するスタッフの存在は何物にも代えがたいものと位置付けている故である。

営業時間の拡大によって、これまでご来店が難しかったお客様にお運び頂ける機会が増え、新たな売上の創出につながっている。

執筆時点では導入開始から2か月余りだが、無人営業・有人営業で客単価を比較すると、前者が2割ほど高い数字となっていて、興味深い。

日々業務に励むスタッフには、売上の最大化という形で手ごたえを感じてほしいし、書店経営の観点からは雇用を維持するために必要な収益確保の手立てとして、活用していきたい。

別の施策としては、当店スタッフによる選書サービス「ブックカルテ」にも力を入れている。

同様のサービスの先駆けとして、いわた書店（北海道）の「一万円選書」があまりにも有名であ

るが、当店が参加している「ブックカルテ」は、前述の「一万円選書」を参考として、小学館の関連会社である（株）エイトリンクスがシステム構築・提供しているもの。

書店（法人・個人問わない）はシステムに登録するだけで負担なく、選書希望者へのサービスを提供できる。

現時点では当店から4名のスタッフが登録しており、サイト上に設けられたプロフィールページにて各人の担当ジャンル・得意分野等をアピールしている。

システムを通して受注したスタッフは、お客様が事前に記入したカルテ（個人の読書経験や生活環境などのアンケート）に目を通して、これまで積み重ねてきた知識・経験をフル活用して約1万円分の本を選書し、発送する。

日常の仕入れ・売り場づくりとともに、このような個別的サービスの提供もまた、書店員の本分といえる仕事ではないだろうか。

ここまで、組合事業である「プレミアム付き図書券」や当店が取り組む「デジタルストア」「ブックカルテ」について紹介してきた。

いずれの施策にしても、より大きな効果を上げるために、書店スタッフは重要な役割を担っていると思う。

ネットでは得られない本との出会い、書店空間を生み出す源は現場で働くスタッフであることを考えると、その成長を後押しするために出来る限りの機会を提供したいと考えている。

今年10月からは、出版文化産業振興財団（JPIC）が書店員のためのeラーニング講座を開講、



著者近影

新入社員向け・一般社員向け・管理者向けとコースを分け、充実したプログラムを用意してくれた。

これまでも当店では「トーハン書店大学」「JPIIC読書アドバイザー養成講座」などを通して書店スタッフの学びを推進してきたが、今回はリスクリングの一環として私を含む全スタッフの受講を開始したところである。

本稿で挙げた取り組みはすべて、自治体の既存制度や、書店活性化に資する仕組みを開発した事業者による提供システムの活用によるものである。

投資余力に限られた小規模書店であっても、打つ手は残されているのではないか。

志とアンテナを高く保ち、地域のニーズに応え、掘り起こす努力を続けていきたいと考えている。

人やまちとつながる「広場」のような図書館をめざして

嘉賀 收司（境港市民図書館 館長）

境港市民図書館は、「広場」と書かれた書を掲げています（図1）。

その書は市内在住で肢体不自由・二分脊椎の森山彩乃さんより、令和6年6月に寄贈されたものです。森山さんは車椅子で生活し、うつ伏せで書に取り組まれています。

その書の下には、『本のある広場』とは、人々に広く開かれた場所であり、年齢・性別・国籍・障がいの有無などに関わらず、誰もが利用できます。」と始まる文で、私たちの図書館が目指す姿を掲示しています。そこには、異なる考え方や様々な感情・思いが込められた本を置く図書館だからこそ、「誰をも受け入れたい、誰にも読書を楽しんでもらいたい」という願いを表しています。

1 境港市の魅力と課題

境港市は、鳥取県西部の大砂州である「弓浜半島」の北端に位置し、平坦な上に約5km四方で囲まれたコンパクトな市です。人口は令和7年9月末現在約3万1000人で、人口密度は県内第1位です。

古くから天然の良港であり、江戸時代には北前船の寄港地としてにぎわい、戦前は大陸貿易の拠点港として大いに繁栄しました。

今日では、生本まぐろやベニズワイガニの水揚げで日本一に輝くなど、日本有数の水揚げ量を誇る漁港として、水産業も盛んです。また、環日本海時代を担う貿易

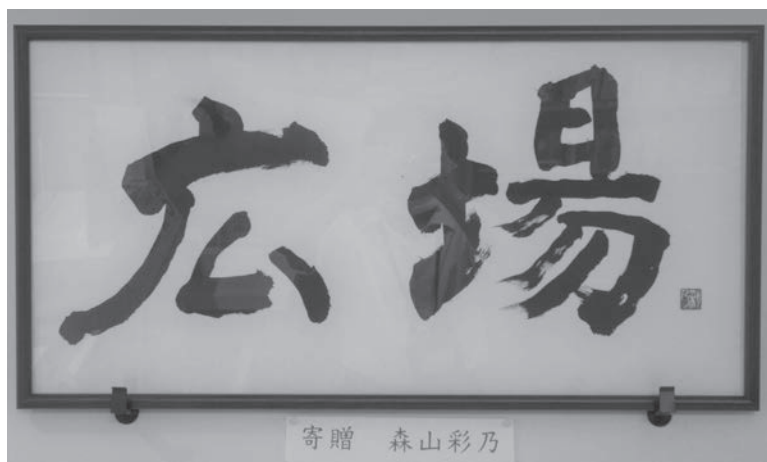


図1 書「広場」 森山彩乃作

の拠点である港、海外ともつながる米子鬼太郎空港もあり、国際的な水産都市・貿易都市づくりを目指しています。また、「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる漫画家水木しげる氏や、世界的な写真家である植田正治氏の生誕の地でもあります。

なお、その米子鬼太郎空港は航空自衛隊美保基地が管理運営する共用飛行場です。その航空自衛隊美保基地とは昭和18年旧海軍の基地として開設以来、現在に至るまで境港市とは大きなつながりがあります。

2 境港市民交流センター・境港市民図書館

(1) 開館に向けて

昭和27年に、現在の市民図書館の母体となる上道公民館図書室ができ、その後境港町立図書館、鳥取県立米子図書館境港分館を経て、昭和52年に新しく図書館を建設し、境港市立図書館として開館しました。そして、昭和62年6月にその隣に新しく建物を増築したことを機に、「市民のための図書館であってほしい」という願いを込めて、館名の「市立」を「市民」に変更しました。

しかし、境港市民会館ホールが平成25年の耐震診断の結果、「倒壊又は崩壊する危険性が高い」と判断され、市民会館及び併設された図書館分館の解体作業が始まり、平成30年12月に終了しました。

その後、境港市民の文化・芸術の拠点であった市民会館の再建設にあたり、多くの方から出されていた「市民会館と防災の拠点と図書館など、一体的な施設を考えた方が良いのではないか」という案について、ワークショップや検討委員会などで議論を重ねてきました。

そして、平成28年3月に境港市が出した「美保飛行場周辺まちづくり基本計画」の中で、「市民が集い、安心できる、交流と防災の拠点づくり～みんなが集まる広場のような複合施設～」と基本理念が示されました。

令和元年と令和2年には、図書館独自で利用者にアンケートを行いました。「新図書館へ期待すること」という設問に対して、雰囲気に関する「ゆっくり、ゆったり、明るい、気軽」や、施設設備に関する「書架の高さ、通路幅」について記述する回答が多く見られました。

その他、「ネット環境、自動貸出機・返却機、椅子」などについての要望も見られました。

(2) 市民交流センター(図2)

「文化・芸術の交流の拠点、図書館、防災の拠点」といった役割を持つ市民交流センター(愛称…みなとテラス)は、地上2階建て(一部3階)高さ24・8m、延床面積6870㎡で、800席の市民ホール、大・中・小会議室、和室、カフェを備え、市教育委員会生涯学習課と防災危機管理課も施設内に入っています。

管理運営形態については、ホール・会議室等は指定管理者、図書館は教育委員会直営です。

(3) 図書館の概要

図書館は、市民交流センター1階の南側にあり、境中央公園に面しています。図書館の入口から一步館内に入ると、大きな窓に木々の様子が目に飛び込んできます(図3)。窓からの自然の光と、書架等の木の色調と合わさって、公園と一体化したような明るく開放的な空間となっています。

一般図書コーナーのメイン書架は、地震などの揺れがあっても資料の落下を防止するように、棚板に傾斜をつけることができます。

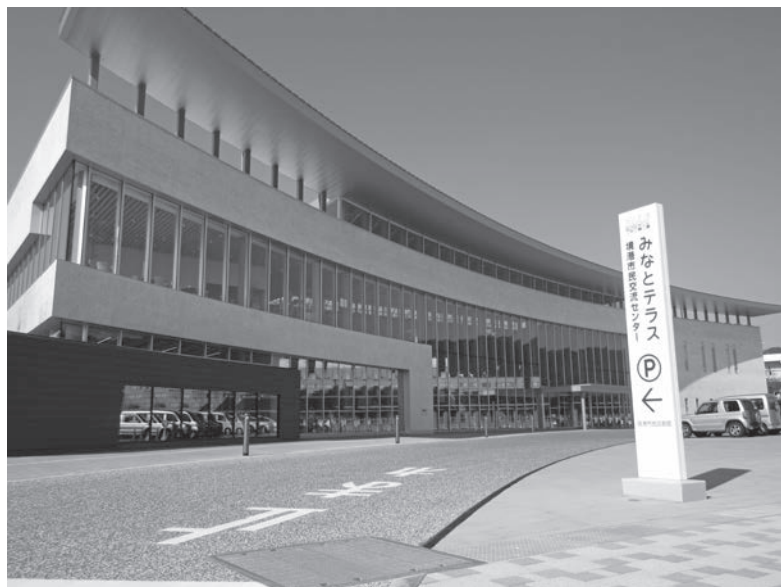


図2 市民交流センター全景



図3 図書館の入口付近



図4 自衛隊・防災コーナー

書架の高さは、車椅子に乗っていても上段の本を手にとることができる150 cm台とし、書架と書架の幅は車椅子がゆったりと通ることができるようにしました。配架の特徴としては、郷土資料「水木しげる」「植田正治」以外にも、「海と魚」「妖怪」「自衛隊・防災」「環日本海」などのコーナーを設けています。

特に、「自衛隊」をまとめて配架している図書館は全国的に珍しいかもしれません(図4)。以前から郷土資料として様々な資料を収集保存してきていましたが、新しいコーナーに配架するということで、別置記号を設けました。このコーナーには自衛隊の関連図書だけでなく、広報誌なども置いています。

こども図書コーナーの書架も安全面への配慮から、曲線の棚板や壁面の書架の棚板にはノンスリップ塗料を塗布、さらに一般書架と同様に、天板及び棚板の角は面取りがしてあります。

カーベットを敷いたプレーコーナーを設け、本を読むだけでなく、親子でパズルをしたり玩具で遊んだりゆったりと過ごせる空間にしました(図5)。一人か二人しか座れない“押入れのような”席も8か所作りました。



図5 プレーコーナー

座席数については、できるだけ多様に使えるよう、窓際カウンター席、スタディールーム、コワーキングルームをはじめ、館内全体で約160席を設けました。

(4) 館内展示

館内では、開架面積の割には多い常時13以上の展示をしています。

まず入口を入ると、「学びの講座」などの図書館主催イベントや市各課等と連携した関連本の展示を目にします。例年9月は市の長寿社会課や防災危機管理課と一緒に、「アルツハイマー月間」と「防災月間」の展示をしました。

館内を進むと、4つのメイン展示台があり、3つの展示台は一般担当と子ども担当が毎月企画した展示をし、もう一つの展示台は、本や活動の様子の紹介に使ってもらうために「さかいみなと図書館応援団」に提供しています。

さらに、境中央公園をのぞむ窓際には、メイン展示台よりもコンパクトな7つの展示台があります。一つ目は、市史編さん室職員が月毎に展示する郷土資料コーナー、



図6 「読書のあしあと」 表表紙(左)・裏表紙(右)

その隣の二つ目は、市健康づくり推進課と連携して行う「健康と食」をテーマとした展示です。

その続きからは、全職員が月替わりで思い思いに担当する展示台となります。どれも個性あふれたポップと選書となっていて、なかには「どんな発想でこの展示?」と思わず立ち止まってしまいう展示もあります。

これらの展示台は、図書館全体にアクセントと彩りを加えていて、ふと本を手にとってしまい、新たな本との出合いが生まれそうな展示となっています。

(5) 読書のあしあと

開館にあたり、新しく導入したことの一つに「読書のあしあと」(読書履歴通帳)があります(図6)。そのデザインは楠智子さん(境港出身の元マンガ家、伊藤ゆうさん)によるものです。それを「本を読む楽しみや図書館に来るきっかけになれば」という願いを込めて、開館前に市内の小中学生・幼稚園・保育園の全ての子どもたちに無料配布しました。休みの日などには、子どもたちが「読書のあしあと」を握ってやってくる姿や、記帳してうれしそうな表情を見かけます。今では、2冊目も終わりそう

な子どもたちも多くなります。

また、市健康づくり推進課主催の生後6か月健診時に行われるブックスタート時に、「お子様の成長に合わせ、読んだ本のあしあとを残していきたいませんか」といった言葉を添えて渡しています。ちなみに、市内外を問わず希望者する方には無料で渡しています。

なお、この「読書のあしあと」の表裏面には、様々な年齢で容姿、国籍、ファッションも違う子どもたち、様々な職業の人、年配の人、妊娠中の人、子育て中の人、障がいのある人など多様な人が生き生きと描かれ、「図書館は誰もが気軽に訪れることができる場所でありたい」という楠さんの願いが込められています。これは、「広場」に込めた図書館の思いと同じです。

3 具体的な取組

開館当初から、図書館の運営ミッションの一つとして、「まちや市民とつながる図書館運営を行います。」と掲げ、市内の小中学校9校と市内公民館7館及び自衛隊美保基地・老人福祉施設とのつながりをベースに、「まちまる

ごと図書館」の実現に向けてスタートしました。

しかし、目指す図書館に向けて、現状や方向性が合っているのかという迷いと、活動の広がりと共に増えてきた多様な方々への対応を含めて、読書バリアフリーをどう進めていくのかという課題が生まれてきました。令和5年に導入された移動図書館車の活用方法と、書「広場」を掲げるにあたり、当館のコンセプトについて職員間で話し合うとともに、今後の方向性を検討しなおし、「まちまるごと図書館」を目指して人やまちと関係を作っていくことが、私たちが考える「広場」のような図書館に近づくことと再確認しました。

(1) 自衛隊美保基地

境港市民交流センターを建設するにあたり、自衛隊との交流促進が基本方針の一つになっています。館内に「自衛隊・防災」コーナーを設ける以外に、理解や交流促進のために、ブラウジングコーナーで、自衛隊員によるジャズ演奏会を開いたり、自衛隊への理解を目的に自衛隊地域協力本部のトークイベントを開催したりしています。毎年5月末に行われる美保基地航空祭前の1か



図7 自衛隊パネル展

月間、歴代のポスター展を開いています(図7)。
 なお、図書館がリニューアルする以前の令和2年9月から美保基地内で月1回移動図書館を開いています。勤務のために普段図書館に行くことができない隊員や、図書館の場所を知らない他県・他郡市出身の隊員の方中心にご利用いただいています。

(2) さかいみなと図書館応援団

図書館のリニューアルオープンに合わせて、令和3年9月に、「人々が集い、つながり、活動し、知や生活や交流の『要』となる『境港市民図書館』を応援し、見守り、育てていくこと」という趣旨のもと約180名が集まり、第一回の総会が行われました(令和7年10月1日現在会員約270名)。それ以来、いろいろな場面で支援をしていただいています。

例えば、新しい建物へ引っ越した際には、平日にもかかわらず12日間で延べ238人のみなさんに、段ボールから本を出したり書架の整理をしたり、開館に向けた準備作業に協力していただきました。本を書架に戻す作業をしながら、「(新しい図書館になって)本も喜んでいま

ね」と話をされる表情が印象的でした。

現在、図書館主催のイベント等の協力をしてもらった
り、応援団が企画したイベントに会場を提供したりする
など、連携を取っています。その他、図書館ウッドデ
ッキでプランターの花の植栽、本の返却作業などにも力を
貸してもらっています。

(3) 困り感を知り寄り添うために

市福祉課主催の福祉まつり「ほっとはあと」に協力し、
そのうち3つのブース(点字作成体験・白杖体験・SignTalk)
を図書館内で開催して、令和7年で3回目となりました。
参加する障がいのある方にとって、ご家族と一緒に
あっても図書館に入る機会自体が少ないというのが実態
です。一方、ふだんは図書館を利用する方も障がいのあ
る方と共に同じ空間で過ごすという経験が少ないためか、
戸惑うような様子も見受けられます。

そういった状況を障がいのある方やご家族はやはり敏
感に感じ取り「入りにくい」といった思いが先に立つ
と聞きました。

そういった現状を少しでも改善するために市福祉課と

協議し、市内障がい者団体と障がい福祉サービス提供事
業者を対象に、令和6年度から月末休館日に館内で利用
の仕方を伝えたり過ごしてもらったりする体験会を案内
しています。ふだんの来館につながることを目指してい
ます。令和7年度の福祉まつり「ほっとはあと」の開催
前には、障がいのある方とそのご家族が作る団体の50数
名の方が開館日に来館して、館内で過ごされたり本を借
りられたりしました。

その他、鳥取県ライトハウス点字図書館と共催し、月
1回図書館入口前で、「活字が見えない・見えにくい・
活字を読むことに困難のある方」のために、専門員が本
人や家族、民生委員や教育関係者の方からの相談を受け
たり、専用機器を使って録音図書の使い方を学んだりす
る「聞く読書体験会」を開いています。

さらに、ロービジョン者・支援者の方の「つながるサ
ロン会」に定期的に参加し、生活面で困ることを聞いた
り、図書館から情報提供をしたりしています。

(4) 交流・集い・体験

館内には、食育のために作られたまぐろのはく製が展



図8 まぐろのはく製

示されています(図8)。境港は生本まぐろの水揚げ日本一にもなったことがあり、まぐろをブランド化しています。しかし、境港市で生まれ育った子どもたちであっても、まぐろの刺身・切り身は見たことがあっても、まぐろ自体がどのくらい大きいのか見たことがない子どもたちがほとんどです。そこで、市健康づくり推進課からはく製を借り、関連本と合わせて本まぐろの水揚げとなる毎年6月から数か月展示しています。子どもたちは興味津々で、触ってみたり正面から口の中を覗いたりおいを嗅いだりしています。

地元の方を講師として四季を通してのリサイクル工作教室やバルーンアート教室、地元ゆかりの怪談師による夜の怪談会なども行っています。

また、地元ろうあ者の団体の方に来ていただき、手話による絵本の読み聞かせを毎年行い、手話を体験する機会も設けています。

さらに、以前さかんに栽培された伯州綿をもう一度特産品にしようと、現在境港市は力を入れています。伯州綿については、図書館でも郷土資料として収集・充実を図っていますが、毎年希望する利用者と種まきから収穫



図9 大人の食育「まぐろ食べらいや！」

までをプランターで体験するイベントを企画しています。それに合わせて、地元シャツ仕立て職人の方による機械り体験教室も行っています。

(5) 図書館字びの講座

開館当初より毎年5〜6回、地域の魅力を再認識することを目的に、境港市に在住またはゆかりのある、様々な職種や立場の方から学ぶ講座を、館内のブラウジングコーナーで開催しています。昨年度から「ウェルビーイング」をテーマにした内容となっています。

例えば、「市民が地元食材の調理の仕方」を学ぶ「大人の食育講座」を、春は「マグロ」、冬は「カニ」といった地元を代表する水産物にスポットをあてて、市内で飲食店を営む方に、下ごしらえをしたまぐろやカニを使い、基本的な調理方法からアレンジ方法までを参加者の目の前で紹介してもらい、参加者に試食もしてもらっています(図9)。令和7年度からは、その様子を図書館ホームページ上で動画の配信も始めました。

(6) 公民館・事業所など

「図書館まで行くことができない」という市民の声を受けて、令和元年度から、市内全7公民館と民間老人福祉施設を分館として、定期的に本を入れ替えながら約130冊を置いていきます。公民館主事の方にサポートしてもらい、貸出・返却をしています。令和6年度からは、市老人福祉センターにも分館を置くなど、市内に分館を増やしています。

令和6年度からは、その分館を活用して、市内全公民館と市老人福祉センターで、①市民図書館で借りた本を返却できる ②市民図書館にリクエストした本を受け取れる、といったサービスを始めました。図書館から一番遠い公民館であっても、車で10分以内に行くことができます。コンパクトシティの利便性を生かしています。

その他、市内の4公民館では、図書館職員が出向き、月1〜2回音読教室を行っています。毎回どの場所でも、10名前後のご年配の方が楽しみにやってこられます。

(7) 移動図書館車の活用

境港市にゆかりのある方のご寄付により、令和5年12

月から移動図書館車が導入されました。活用方法についてはいろいろと検討しましたが、ふだん図書館に来ることが少なく、本に親しむ機会が少ないであろう障がいのある方々を主な対象としました。現在は、市福祉課から紹介を受けた就労支援継続B型事業所と市内全公民館を訪問しています。どの事業所の方も喜んでおられ、中には「みなさんがこんなに本を読まれるとは分かりませんでした。みんな楽しんでおられます」と教えてくださった職員の方もおられます。借りた方からも「新しい趣味が増えた」「心が落ち着く」といった声も頂きました。ちなみに、職員の方々にも本雑誌の貸出をしています。事業所によっては、事業所として団体の数十冊借りて、休憩所においておられるところもあります。

(8) 外国人技能実習生等

境港市には、水産業関連事業者中心に、ベトナム国籍の約200名を筆頭に数か国の外国人技能実習生がいます。そこで、彼らが勤める事業所に団体貸出や個人利用証作成の説明をし、いつ彼らが来館しても、あるいは会社が団体の借りてもいいように、母国語で書かれた小

説やコミックなどの収集充実に努めています。

市水産商工課経済交流係と連携を取り、彼らが集まる夏祭りやイベントで出前図書館を行い本に興味をもってもらったり、居場所としての図書館の広報もしたりしています。

(9) 学校

市内小中学校9校の学校図書館とは同じシステムを使い、市民図書館から学校図書館に団体貸出をしています。また、学校図書館職員(市職員)と研修会を開いたり、市民図書館の研修会への参加を呼びかけたりしています。

また、小学校の見学・学習成果発表の展示を積極的に受け入れています。例えば、市内全校(6校)と市外3校の2年生が見学に利用したり、総合的な学習のまとめを館内で掲示したりしています。

中学校・高等学校においては、職場体験学習に協力し、毎年数名3〜4日間受け入れています。カウンター体験や書架整理の他に、おすすめの本のポップ作りや学生から見たYA(ヤングアダルト)コーナーの充実のための提案をしてもらっています。

また、市内の高校とは、館内の一角に活動の様子を知らせる展示台を設けたり、本のポップを描いてもらったりするなど連携を図っています。

(10) その他

館内に置いている花卉への生け花を、広く一般の方に呼びかけたり、ブラウジングコーナーに絵画やイラスト、写真の展示を募集したりしています。

大学生や一般の方の返却等のボランティアを受け入れています。

また、意見箱を置き「図書館をよりよくするために」利用者から意見をいただいています。図書館の取組に感謝する言葉や肯定的な内容の他、日頃気になることや批判的な意見もいただいています。全ての回答に図書館の考えや思いを示し、掲示しています。

4 人やまちとつながる「広場」のような図書館

図書館に携わる者の一人として、図書館内外で人やまちとつながり始めて、改めて納得していることがあります。

す。

それは、利用者の言葉や表情、しぐさから伝わってくる「本を読むことが喜びや楽しみになっている」とか、「図書館が役に立っている」といったことが、私たちの自己有用感の向上になっているとともに、本を主人公に利用者と話をするこの心地よさを感じ、大きなモチベーションになっているということです。だからこそ、お互いをつなぐ主人公たる本の選書には真摯でありたいと考えています。

最後に、私たちの取組を地道に続けていくことで、少しでも毎日のくらしを気持ちよく過ごせたり、楽しみが増えたりすることにつながり、人々の間でじわじわと広がっていけば、まちをまき込んだ広場のような図書館が見えてくるのかもしれない。

に丁寧にご案内いただく。開館から10年以上を経ても未整理になっている膨大な資料に圧倒された。著作も数多く、人文会会員社では、春秋社刊『中村元選集(決定版)』(全32巻／別巻8)をはじめ、『原始仏典』(ちくま学芸文庫)、『論理の構造』(上下巻、青土社)などが刊行されている。

松江市に隣接する鳥取県米子市に移動し、本の学校今井ブックセンターに向かう。人文会にとっては、2016年に研修会をおこなった思い出深い店舗である。ちょうど人文のご担当が交代になるタイミングとのことで、前担当の妹尾賢造さんと新担当の森田智春さんにご挨拶する。今後棚の見直しを進めるとのことなので、会としてもサポートしていければと思う。

行程の最後は、境港市民図書館。人文書にとって、地域の知の集積場である図書館の存在は非常に大きい。各地の図書館を訪問し、集書の基準や出版社との連携について何うことも、人文会のグループ訪問では大きなテーマとなる。

嘉賀収司館長にお話を伺った。2022年7月にリニューアルオープン。隣接する市民会館が建て替えになり、みなとテラス(境港市民交流センター)として再生した際に、移転し入居した。以降、子どもの来館が増え、貸出数は以前の2倍に増加したという。港湾という立地や漫画家・水木しげるの出身地であることから、「海・魚」「妖怪」関連書が充実する品揃え。希望者に無料で配布している読書通帳「読書のあしあと」は読書の記録として重宝すると感じた。

以上で予定された訪問はすべて終了。今年のグループ訪問4班の掉尾を飾る、というと聞こえはいいが、単にスケジュール調整がままならなかった結果として記録的な猛暑のなかでの訪問となり、ひどく体力を消耗する3日間だった。しかし、なかなか明るい話題を聞くことができない出版・書店業界において、「人文書販売の手引き」を片手に難しい人文書の棚づくりに奮闘する方々の姿には大いに勇気づけられた。

今回訪問させていただいた皆様、お忙しいなかお時間を割いていただき本当にありがとうございました。皆様の日頃の努力に少しでも報いることができるようサポートするのが人文会の役割と任じております。ご要望、お悩みごとなど、ぜひお気軽にご連絡ください。



今井書店松江本店

で一定の面積を占めているCD・DVDレンタルで、今後店全体のレイアウト変更もありえよう。

次に紀伊國屋書店ゆめタウン出雲店。2023年11月オープン、紀伊國屋書店としては山陰地方初出店となる。仲岡慎治店長と人文担当の長崎健治さんにご対応いただく。長崎さんは同モールに2023年8月まで存在していた今井書店出雲店

から引き続き勤務されており、以前に比べ若い客層が増えたという印象を持たれていた。売上は好調とのことで、メインターゲットではないとはいえ（客層は若いファミリーが中心）、人文書についても引き続き注目していきたい店舗である。

松江市に場所を移し今井書店松江本店に到着する。かつての今井書店グループセンター店が7か月の大規模改装を経て、2025年4月にリニューアルオープンしてまだ日が浅い。カフェやコワーキングスペースを備えた居心地のいい空間になっていた。板垣健司店長と人文担当の吉儀千栄美さんにお時間をいただき、オープン後の状況を伺った。好調ぶりは老若男女問わず賑わう売場の様子からもうかがえる。吉儀さんは人文書の棚づくりにたいへん意欲的で頼もしい限り。主に歴史・宗教・心理棚の改善について有意義な意見交換をおこなうことができた。

この日の最後に訪問したのは、今井書店松江外商部。今井書店は、鳥取・島根両県をエリアに、鳥取倉吉・米子・松江・出雲・浜田の5拠点で外商活動をおこなっている。今回は、福田大貴外商部長をはじめ、小林正記さん・丸本圭さん・横山愛磨さんに最近の状況をお話いただいた。この地域でも書店の廃業が絶えず、自治体から今井書店を頼みにされることが増えているという。人文会は毎年の展示会に出品するかたちでお世話になっているが、建設的に施策を見直す方向で議論が進んだ。

最終日は、書店訪問とは趣向を変えて博物館の見学から。

訪れたのは中村元記念館。2012年に開館、松江出身で仏教学の世界的権威、中村元の業績を紹介し、蔵書の一部を展示している。学芸員の加藤千乃さん

年で人文書の棚づくりに意欲を見せる岡さんに引き続き期待したい。

次に訪れたのは丸善広島店。広大な人文書売場を管理されているのは丸田香織さん。担当されて長いが、より良い棚への努力を惜しまない姿勢には頭が下がる思い。人文関連の多くのフェアを開催していた。店内の一角は「2025大阪・関西万博オフィシャルストア」となっており、一人あたりの購入制限を設けるほどの盛況ぶりとのこと。

その後は広島駅に向かい、ジュンク堂書店広島駅前店へ。担当の佐伯菜央美さんにご対応いただく。昨年10階から6階にフロア移動し売場が縮小したものの、コンパクトでまとまりのいい品揃えになっている。担当されて1年、人文書についてはまだ悩むことも多いとのこと、「人文書販売の手引き〔第3版〕」をお渡しする。来年、ビルの8～10階に広島市立中央図書館が移転してくる予定になっており、相乗効果が期待されよう。

駅から山陽本線とタクシーを乗り継ぎ、広島市に隣接する廿日市市の臨海エリアにある紀伊國屋書店ゆめタウン廿日市店へ。人文会として初の訪問となる。森田利恵店長と担当の香川幸恵さんにお話を伺った。2015年オープン、山口県からも来店するという大型モールで、若いファミリー層が目立つ。児童・実用・コミックを中心に据えているが、人文書も決しておろそかになっていない。年配の読者を意識して「歴史」をあえて低い什器の実用書の並びに配置したり、人文会会員社の刊行書籍も多い「10代向け教養」というコーナーを設けるなど、随所に工夫が感じられるお店だった。

広島市に戻り、この日の最後は紀伊國屋書店広島営業所。佐藤亮平所長をはじめ大島隆雅さん・大谷行さん・松本廉平さんにご対応いただく。この若い4人体制で広い広島・島根・山口エリアをカバーしている。大学図書館はデータベースや海外の電子ジャーナルに予算を割かれ、和書の購入は減っているという。だが、欠本調査やリストの提供など会として取り組むべきことはまだまだあろう。貴重な情報交換の時間となった。

2日目。高速バスに揺られること3時間、昼前に島根県は出雲市に到着する。

最初に訪れたのは今井書店出雲店。森山由希子店長が人文書も担当する。ロードサイドの広大な店舗で専門書の品揃えも充実している。ここより西に専門書を置いている書店はないとの言には、地域を支える書店としての自負が感じられた。課題とされるのは、需要が減少しているにもかかわらず売場

や出版社と協同する体制を整えつつ、市民へのサービスを最大化する方法を模索していた。順境とは言えない出版業界にあって、それぞれが非常に頼もしく感じられた一方で、版元の立場から何ができるかということを深く考えさせられるグループ訪問となった。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず今回のグループ訪問に御対応してくださったすべての書店様、図書館様に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

山陽・山陰班 (広島・島根・鳥取)

報告 片山伸治 (吉川弘文館)

- 期日：2025年7月30日(水)～8月1日(金)
- 参加メンバー：吉岡聡(春秋社)・水口大介(創元社)・中沢佑次(白水社)・片山伸治(吉川弘文館)
- 訪問先(訪問順)
 - 【広島】紀伊國屋書店広島店、丸善広島店、ジュンク堂書店広島駅前店、紀伊國屋書店ゆめタウン廿日市店、紀伊國屋書店広島営業所
 - 【島根】今井書店出雲店、紀伊國屋書店ゆめタウン出雲店、今井書店松江本店、今井書店松江外商部、中村元記念館
 - 【鳥取】本の学校今井ブックセンター、境港市民図書館
- 感想

今回私たち4社が訪問するのは、広島から島根・鳥取を巡回するコースとなった。広島は昨年に続き2年連続となるなど頻繁に訪問しているが、山陰方面は実に2016年以来の人文会グループ訪問となる。この9年の状況変化を確認する良い機会としたい。

初日は、まず紀伊國屋書店広島店を訪問した。昨年50周年を迎えた老舗店舗で、昨年より紀伊國屋書店と人文会の共同施策として展開している「人文書 今月のイチ推し」フェアの開催店舗のひとつ。山本紗綾店長と人文担当の岡利昌さんにお話を伺う。商品入れ替え直後にお客様が足を止められることも多いとのことで、毎月のフェアが定着していることがうかがえる。入社1

部育真店次長、人文書担当の畑山真吾さんに近況をうかがう。コロナ禍の最中に行っていた、雑誌定期購読のポイントキャンペーン施策等が奏功し、売り上げの減少幅を抑えられているとのこと。

その後、平安堂長野店外商センターへ移動し、山浦栄司センター長と柳沢京子さんにお話をうかがう。長野県内の飯館村、長野市、信濃町、須坂市、小布施町、高山村、千曲市という広範囲のエリアをカバー、小・中・高・大の学校や官公庁、美容院やクリニック等も回っているとのこと。毎年、統廃合により学校数が減っていることを懸念されていた。

その夜は、平安堂の長崎深志取締役、佐々木長野店店長と懇親会を行い、出版業界の今昔に関するさまざまな話題について、長崎さんの長年の経験に培われた含蓄のあるお話をうかがうことができた。

最終日は、まず平安堂本社へ向かい、書籍事業部商品管理部の羽生田亜紀さんにお話をうかがう。チェーン14店舗(上田店のみFC店)の仕入れ商品をカバーしており、担当者会を月に1回開催し、売れ筋情報等を共有しているという。

その後、善行寺へ移動し参拝。参道を下る形で長野西澤書店を訪問。山口憲邦課長にご対応いただく。昨年にブックカフェとしてリニューアルオープンし、店頭には御朱印帳やインバウンドも意識した観光客向けの実用書、コミック等も充実した品揃え。さらに参道を下り、書肆朝陽館へ。2019年に一度は廃業した朝陽館萩原書店をブックカフェの形で2021年にリニューアルオープンしたお店。店に並ぶ書籍の選書はもちろん、什器を自作するなど、随所に店主である萩原英記さんのこだわりが見える。

最後は塩尻市に移動し、塩尻市立図書館へ。訪問直前に雷による停電に見舞われたにもかかわらず、矢澤昭義館長、北澤梨絵子さんにご案内いただく。NDCだけでなく独自の書架分類を加えての書籍の配架、イベントの開催や関連書籍の販売も行うなどの先駆的取り組みを行われている。また、市内の4書店と均等に取引を行い、広報誌にも各書店がおすすめする書籍の紹介コーナーがあるなど、地域密着の体制を築かれている。

以上で全行程を終了。全国的な傾向でもあるコロナ禍以降のライフスタイルの変化に加え、車移動が中心のため市街地の人流も減少しており、今回訪問させていただいたどの書店も集客の課題を抱えながらも、それぞれのアプローチで懸命に対応しようとする姿が見られた。また、図書館は地域の書店



平安堂長野店訪問の様子

がい、例年春に開催していた専門書フェアについては、今年は一度お休みして来年あらためて開催することなどを確認した。その後、笠原社長、曽根原さんと懇親会を行い、その席で話題となった、県内書店が中心となって毎年開催されている「つなごう読書の絆・諏訪湖一周禪マラソン」に、後日人文会4社で参加させていただいた。

2日目は、まず岡谷市から松本市へ移動し、最初に訪れたのは松本市中央図書館。通常の図書の他にも、ユタ州に移民した日系人が発行した

新聞を集めた「ユタ文庫」や、山岳関係書籍約9000冊を収める「山岳文庫」といったユニークなコレクションを所蔵している。館内を見学した後、藤森千穂館長、篠田尚利館長補佐、降旗さやさんに館の概要をご説明いただくとともに、すでに一部の版元では開始している欠本調査についても継続展開を提案。

市街地へ移動し、丸善松本店を訪問。人文書担当の土屋俊一さん、古田愛佳さんは、前任の方の退職により急遽担当となられたとのこと。駅前の百貨店やパルコの閉店の影響もあり人通りも少なくなった影響が出ているとのことだが、専門書の品揃えはさすがの一言。

その足で松本駅の駅ビル内の改造社書店MIDORI松本店を訪問し、百瀬淳店長にご挨拶。65坪の小さなお店ながらも、人文書棚では判型の異なる同テーマの書籍を面陳で重ねて展開するなど、独特な棚づくりをされていた。

次に市街地を抜け、信州大学生協松本購買書籍部を訪問。信州大学の教養+文系学部+工学部キャンパスの店舗で、佐藤朋幸店長と専門書担当の竹村道行さんにご対応いただく。店内では大学と地元企業との協同開発のワインなども販売。専門書についても新刊が充実しており、大学生協事業連企画の読書マラソン等も展開されていた。

そこから長野市へ場所を移し、平安堂長野店に到着。佐々木紀行店長、勝

店、書肆朝陽館、塩尻市立図書館

●感想

今回訪問する山梨県と長野県は、2018年の人文会グループ訪問以来の訪問となる。コロナ禍を挟んだこの8年間の市況の変化や、市場規模が縮小する中でどのような協同施策を行っていくべきか、書店だけでなく公立図書館3館を含め、意見交換を行うのが目的となる。今回、公共交通機関はほぼ使用せず、基本的にはレンタカーを借りての車移動での行程となった。

初日にまず訪れたのは甲府駅の駅ビルに所在するくまざわ書店セレオ甲府店。オープンから2年弱であり、当日ご対応いただいた長谷川和店長も着任からまだ間もないとのこと。新刊を中心に好調な売れ行きをキープしており、ロングセラー書目の整備によりさらなる売り伸ばしに期待したい。

次に明治35年創業の老舗朗月堂書店を訪問し、人文書担当の斉藤章さんにお話をうかがう。定番書は堅調だが、複数ジャンルを担当しているためなかなか人文書の棚に手を入れる余裕が持てない状況とのこと、棚構成の見直しに「人文書販売の手引き」等を活用していただくことを提案。その後、須藤玲子社長も加わり会食、帰りの際にはメンバー各人にワインをお土産にいただいた。

朗月堂書店を辞去し、山梨大学前に所在する星野書店を訪問。山梨大学は教育学部・工学部・医学部・生命環境学部で構成されるため以前は理工系専門書を豊富に在庫していたが、国立大学研究費の減少により大学関係者の注文も限定的になったとのこと。店主の須藤紀子さんは「ほんのかけはし」という独自のニュースレターを発行するなど、さまざまな試みを展開されている。

そこから長野県岡谷市へ向かい、笠原書店岡谷本店を訪問。到着早々に笠原新太郎社長とともに市立岡谷図書館を訪問。小坂英之館長と味澤登志子さんをはじめとした司書の方たちと意見交換を行う。小規模館ながら近隣7館（他市町村）と蔵書を共有・相互貸借することで市民への迅速な図書の提供をしており、ロングセラー書籍の欠本補充についても前向きに検討されている。

笠原書店岡谷本店へ戻り、あらためて店内の様子を拝見。レトルトカレーや夢グループ施策、古書展開などの集客施策を行う一方で、人文書新刊コーナーを拡充され、郷土史コーナーも入り口近くで大きく展開されていた。その後、竹村克彦本店長、松本外商部長の曾根原豊さんも交えてお話をうか

福岡天神蔦屋書店を訪問。入居する「ワンビル(ワン・フクオカ・ビルディング)」の大きさに圧倒されつつ店内へ。スターバックス、シェアラウンジを併設した滞在型の機能を持つ構成で、売場面積こそ広くはないものの書籍以外の多様なアイテムも扱っている。ご対応いただいたのは書籍担当の窪田将大さん。オープンスタッフはほぼ書店未経験とのことで驚いたが、他店舗のコンシェルジュやAIによる自動発注などチェーンとしての強みを活かしながらつつがなく運営されている様子。人文書は注目しているジャンルとのことで、フェアにも力をいれていきたいそう。今後の展開を楽しみにしたい。最後の訪問先は、くまざわ書店福岡西新店。こちらでは生田将吾店長にご対応いただいた。都心から少し外れた文教エリアの駅ビルで、周囲には西南学院や修猷館など伝統校が建ち並ぶ。今年でオープンから6年目、文教エリアの客層や競合店の閉店なども重なり、売上は好調をキープ。売場面積が限られているが、客注で専門的な本も動いているようで、客層の厚さを感じられた。

以上で3日間の行程を終了。短い間隔で訪問させていただいた店舗も多く、継続的なコミュニケーションの成果を感じられる一方、新たな発見や収穫となった訪問先もあり、まだまだフォローすべき余地があることも感じられる有意義な機会になった。時間を割いていただいた書店の皆様に心より感謝を申し上げる。お忙しいなか快くご対応いただきありがとうございました。

甲信班(山梨・長野)

報告 乙子 智(慶應義塾大学出版会)

- 期日：2025年7月2日(水)～7月4日(金)
- 参加メンバー：佐藤信治(大月書店)・片桐幹夫(みすず書房)・足立佑(東京大学出版会)・乙子智(慶應義塾大学出版会)
- 訪問先(訪問順)

【山梨】くまざわ書店セレオ甲府店、朗月堂書店、星野書店

【長野】笠原書店岡谷本店、市立岡谷図書館、松本市中央図書館、丸善松本店、改造社書店MIDORI松本店、信州大学生協松本購買書籍部、平安堂長野店、平安堂長野店外商センター、平安堂書籍事業部商品管理部、長野西澤書

にも、人文会作成の「人文書販売の手引き」の基本書リストを活用した在庫メンテナンスを行うなど、人文ジャンルの強化を図っている。引き続き人文書、特に心理を強化していきたいとのことで、棚割やフェア展開について意見交換。売り伸ばしへの積極的な取り組みを各社でサポートしていきたい。続いて九州大学生協中央図書館店を訪問。箱崎の文系書籍部の後継として伊都キャンパスにオープンして5年目になる。店名のとおり中央図書館の目の前にあり、教員・学生ともにアクセスしやすい立地。書籍担当の鷲尾麻衣子さんから主に仕入れや棚づくりについて教えていただいた。生協の配本の仕組みに頼らない自店発注や選択常備の活用など教員の専門やカリキュラムにあわせてお店づくりを徹底していることがうかがえた。

伊都からバスで移動し博多に到着。駅ビルで営業する丸善博多店を訪問した。昨年と同じく副店長の前田文雄さんと人文担当の安高啓介さんのお二人と面会。同店自体は昨年と大きな変化はないようだが、直近では同じフロアにあったポケモンセンターが移転してしまい、集客がやや鈍っているそう。今後は代わりに入居する予定の大型テナントとの相乗効果を狙ったお店づくりも検討中との展望もお聞きすることができた。つぎは隣接する博多バスターミナルに移動し、紀伊國屋書店福岡本店へ。昨年もご対応いただいた田中希望さんにお迎えいただき、福岡を含む九州エリアの近況について教えていただき、その後は人文担当の江上僚さんと棚前で意見交換。細かなジャンル分けに苦勞されているとのことで、小一時間ほど版元視点からジャンルの考え方についてお話しさせていただく。2日目の夜は紀伊國屋書店の皆様をお招きして懇親会を行う。

最終日の朝一番は、紀伊國屋書店ゆめタウン博多店を訪問。人文担当の天ヶ瀬英子さんにご対応いただいた。人文と文芸の兼任ということもあり、思うように時間が割けなとおっしゃっていたが、「人文書販売の手引き」なども活用しながら地道に棚づくりに取り組まれている。哲学では倫理の割合を増やすなど、昨年訪問時の提案も反映されており、着実な成果が感じられた。天神市街地にはいり、ジュンク堂書店福岡店へ。ベテラン担当者の上杉雅人さんにご対応いただいた。同店は今年4月に改装して、従来の3フロア構成から2フロアになっていた。以前と比べて売場面積が少なくなったとはいえ、天神エリア随一の品揃えは変わらず。改装後のジャンル構成や影響について教えていただいた。続いて同じく天神エリアにオープンしたばかりの

紀伊國屋書店福岡本店、紀伊國屋書店ゆめタウン博多店、ジュンク堂書店福岡店、福岡天神蔦屋書店、くまざわ書店福岡西新店

●感想

熊本・福岡はどちらも2年連続の訪問になる。熊本は昨秋の研修旅行、福岡は春のグループ訪問で巡回している。地方書店と版元の密なコミュニケーションと、販売施策や棚づくりの継続的なフォローのため、昨年に続き九州エリアを訪問先に選んだ。

初日は熊本からスタート。昨年もご対応いただいた紀伊國屋書店熊本光の森店の西村健一店長と人文担当の山村里香さんに面会。前回の訪問をきっかけにはじまった「人文書 今月のイチ推し」フェア施策についての意見交換を行う。出足がやや鈍いたため展開場所を変更する方向で検討してもらうことになった。お店全体は、観光客の来店もあり、ショッピングセンター(以下SC)の集客が好調とのことで、今後の販売施策の動きにも期待したい。続いて光の森店と同じく熊本市内のSCにある紀伊國屋書店熊本はません店を訪問。平日の午前中にもかかわらず駐車場が混みあっていて驚いた。ご対応いただいた西川和麿店長によると、車で来店する方が圧倒的に多く、近隣地域に根ざしたお店づくりが鍵になっているそうだ。「イチ推し」施策についても常連客のニーズを掘り起こせているとの評価で手ごたえを感じている様子だった。

午後は熊本市内から1時間半ほど車で移動し、紀伊國屋書店あらおシティモール店へ。こちらは書店とカフェ、図書館が併設された「あらお本の広場」が集客の強み。ご担当の植尾あゆみさんにお話しをうかがうと、シニア層や親子連れなどの買い物客に加えて、図書館を利用する若年層の来店も多いそうだ。「イチ推し」施策はその図書館入口へ向かう動線で展開。幅広い年齢層に人文書を訴求するよい機会になっているとのこと。熊本市内に戻り、初日最後は長崎書店を訪問。こちらでは児玉真也さんにご対応いただく。今回の訪問先のなかでは最も小さい店舗だが、専門書にも目配りした的確な選書と細やかな棚づくりで固定客を獲得している。仕入れの情報源は出版社のWebサイト。装丁など詳細な情報が出揃ってから発注をかけるように心がけているとのこと。近刊情報の迅速な提供が売場の充実につながることを改めて実感した。その後は長崎健一社長にもご一緒いただき懇親会を行った。

2日目は紀伊國屋書店久留米店からスタート。開店直後のお忙しいところを店長の花田吉隆さんにご対応いただく。同店では「イチ推し」施策のほか

お買い上げとなった。

名古屋大学生協南部書籍店の安藤幸夫さんから、大学院生のための優遇策として、研究費と生活費を支給するプログラムがあり、それで本を買ってくださっている、という興味深い話をお聞きした。このプログラムは3年ぐらい前に始まり、拡大しつつあり、無視できない金額になっているとのこと。明るい材料である。

紀伊國屋書店プラムツリー赤池店では、三浦慶子店長にお会いした。ショッピングモール内にある、明るい雰囲気ファミリー向けのお店だ。看護・福祉コーナーが店内奥の壁面をつかって8面展開されており、迫力がある。医科大学が近くにあることもあり、需要があるそうだ。三浦店長によると、心理学棚の構築、新刊の発注に悩みがあるとのこと、荻原さん(日本評論社)が対応してくださった。心理専門書の棚をしっかりと作りたいとのご要望をいただいたので、こちらも写真を撮影し、後日必備書を連絡することにして、店を後にした。(後日、大いに心理の専門書をご発注いただく運びとなった。)

以上が、グループ訪問の報となるが、お忙しい中丁寧にご対応いただいた皆様には感謝しかない。改めて皆様の取り組みの数々に触れることで、大いに触発された。いただいた宿題もある。自分なりの誠実さをもって、継続的にお返しできるようにしていきたい。各班長の皆様にも、感謝申し上げます。ありがとうございました。

九州班(熊本・福岡)

報告 東原亮佑(勤草書房)

- 期日：2025年6月25日(水)～6月27日(金)
- 参加メンバー：東原亮佑(勤草書房)、森卓巳(青土社)、本橋弘行(ミネルヴァ書房)
- 訪問先(訪問順)

【熊本】紀伊國屋書店熊本光の森店、紀伊國屋書店熊本はません店、紀伊國屋書店あらおシティモール店、長崎書店

【福岡】紀伊國屋書店久留米店、九州大学生協中央図書館店、丸善博多店、

いるとのことだ。一方、日販名古屋支店では、諸星智範課長、新川浩係長より、無人書店「ほんたす」への取り組みをお聞きした。展望が見えづらい現状のなか、何をやっていくか、こちらも身を引き締める思いとなった。

電車に乗って、丸善アスナル金山店へ。金山駅自体が活気があり、人流がすごい。歩いている人は高校生などの若年層が多い。中畑優さんによると、人文書もしっかり反応がでるそうで、紀伊國屋書店の『愛するということ』がよく売れているそう。同社の段塚さんが嬉しそうである。人文書では心理学が強いそうだ。展開中の「四六版宣言」フェアもよく売れており、ビジネス書版元のランキングもかなり高いとのこと。

最後に、紀伊國屋書店中部営業部の小野誠介部長、望月俊幹次長とお会いする。コロナ禍でリモート授業になり大学テキスト採用需要は増えたが、コロナ後は対面になり、にぶったとのこと。学校の魅力を上手に発信できている大学は回復傾向にあるが、そうでない学校はコロナ前に比べても落ち込んでいる。インフレによる家庭負担への配慮か、大学側が教員に「親御さんの負担を減らして欲しい。あまりテキスト購入を無理強いしないように」と伝え、教員が授業で使うテキストを自作するケースが増えているとのことだった。

3日目は段塚さん(紀伊國屋書店)に班長を担当いただいた。紀伊國屋書店mozoワンダーシティ店へ。名古屋空港店で、専門書や学参が伸びているお店と聞いて期待したが、確かにアクセスが良い、きれいなショッピングモールで、これは週末などは家族連れで賑わうだろう。宮本博幸店長より、ゆくゆくは選書ツアーに取り組みたいというお話をお聞きし、さらなるポテンシャルを確信する。

次はTOUTEN BOOKSTOREで古賀詩穂子さんにお会いした。独立系書店らしくキッチンがあり、ビールや雑貨、ZINE、書籍が並ぶ1階と、2階はギャラリー兼イベントスペースである。

本棚は古賀さんが一冊一冊選んだ書籍が一棚ワンテーマでならべられており、興味深く眺めてしまう。お客さんが古賀さんに話しかけるのを何度も拝見し、顔が見える関係性づくりができているのに驚く。正直、心理専門職むけの弊社の本は不要だろうと思ったが、性暴力被害についてのイベントがあって、その際に弊社書籍のご注文をいただいていた。非常に目配りの効いたお店。妻へのお土産とTシャツをつい買ってしまおうが、班の皆さんも各々

プレートも多く、しっかり考えながら棚を作っており完成度が高い。担当者は他店の売れ筋もデータでしっかりチェックしているとのこと。挿しプレートの多様さについつい食い気味に棚を見てしまう。

名古屋に入り、三省堂書店名古屋本店に向かう。多様な客層で賑わう店内はさすが駅直結の旗艦店。人文書の品揃え、分量も言わずもがなである。この日の懇親会では、奥野純司店長より「数字をとること」と「挑戦すること」をいかに意識しているのかをお聞きすることになったが、売り場で展開されている数々の仕掛けがあらためて思い起こされ、感じ入った。アクセスが良いから賑わっているのではない。その賑わいには理由があるのだ。

人文書担当の大屋恵子さんと久しぶりにお会いし、市況や課題、フェアの段取りについて打ち合わせを行った。会にとっては、レジ前の島でフェアを開催いただいてももう5年目であり、夏の定番の感すらあるが、このフェアもさらなる「挑戦」を求められているのを、はっきりと意識した。宿題である。

続くジュンク堂書店名古屋店では、大竹康和店長にお会いする。アフターコロナを経ての名古屋駅前と栄の商圈をご説明いただく。中日ビルが好調で、名古屋栄店を訪れる人が増えたとのこと。

次に訪問する丸善名古屋本店では、佐藤丈宗さんより、ザ・ランドマーク名古屋栄が来年開業、名古屋栄三越が再開発になるなどのお話もお聞きした。未来に向けて好材料が多い。佐藤さんからは、インバウンドで2階の万博グッズがよく売れているとのこと。6、7階が駿河屋になった分、専門の棚は小さくはなったが、さすが丸善という品揃えであった。

2日目は河内さん(筑摩書房)に班長を担当いただいた。駅前でバスに乗り、紀伊國屋書店名古屋空港店に向かう。人文書担当の海野悠子さんは、「人文書 今月のイチ推し」フェアに、オリジナルPOPを立てる意欲のある方であった。歴史、哲学思想、社会の棚を作るうえでの悩みについて、「人文書販売の手引き」を使って、河内さんが丁寧に説明された。哲学思想については、「人文書販売の手引き」を活用いただいているとのこと。ありがたい。

お昼を挟んで、トーハン名古屋支店へ。藤本直志エリアマネージャーより、無書店地域へのアプローチがいまのトーハンにとってのテーマだそうで、誰でも書店をはじめられるパッケージ「HONYAL」には、数多くの問い合わせがあり、本の移動販売車「Honjour! Car」は、岐阜県海津市や三重県御浜町でイベントを実施したとのこと。草の根レベルで書店の普及に取り組んで

2025年グループ訪問報告

東海班（愛知）

報告 郡司恵太（誠信書房）

- 期日：2025年7月2日（水）～7月4日（金）
- 参加メンバー：荻原弘和（日本評論社）、河内秀憲（筑摩書房）、段塚省吾（紀伊國屋書店）、郡司恵太（誠信書房）
- 訪問先（訪問順）

精文館書店豊橋本店、三省堂書店名古屋本店、ジュンク堂書店名古屋店、ジュンク堂書店名古屋栄店、丸善名古屋本店、紀伊國屋書店名古屋空港店、トーハン名古屋支店、日販名古屋支店、丸善アスナル金山店、紀伊國屋書店中部営業部、紀伊國屋書店mozoワンダーシティ店、TOUTEN BOOKSTORE、名古屋大学生協南部書籍店、紀伊國屋書店プラムツリー赤池店

●感想

今回の訪問先である東海方面は京都・愛知班として2023年に部分的にだけ訪問している。2年ぶりとなる今回も、商圈の規模感、会のこれまでの個別具体的な各種取り組みの経緯からしても、重要な書店が多いエリアであることは変わらない。

人文会は、人文書の普及と人文書の棚を構築する、という会であるのだから、何かを良き方向に変えていきたい書店員さんに、何か具体的なお手伝いができないかを探りたい。前回の京都・愛知班が「人文書販売の手引き」の普及に力を入れた経緯があり、どの程度役にたったのか、確かめたい。とはいえ、アフターコロナで商圈の変化や、市場の状況はどうなっているのだろう。2022年に自分が愛知・静岡班として訪問した店舗のいくつかは閉店してしまっているが……等など、期待や憂慮が入り混じった状態で当日を迎えた。

初日は荻原さん（日本評論社）に班長を担当いただいた。まず訪問したのは、精文館書店豊橋本店。谷本直紀商品部長より、他店と差別化ができるように、人文書を強くしていきたい。既刊のロングセラーをしっかりと入れたいと、力強いコメントをいただく。売り場の心理学の棚は、確かにジャンルの挿し

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2025年12月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	03-3813-4651	03-3813-4656
紀伊國屋書店	段塚省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	03-6910-0519	03-6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	03-3451-6926	03-3451-3124
勁 草 書 房	束原亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	03-3814-6861	03-3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	03-3255-9611	03-3253-1384
晶 文 社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町1-11	03-3518-4940	03-3518-4944
誠 信 書 房	郡司恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	03-3946-5666	03-3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	03-3294-7829	03-3294-8035
創 元 社	水口大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	06-6231-9010	06-6233-3111
筑 摩 書 房	河内秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	03-5687-2680	03-5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	03-6407-1069	03-6407-1991
日 本 評 論 社	荻原弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	03-3987-8621	03-3987-8590
白 水 社	小林圭司	101-0052	千代田区神田小川町3-24	03-3291-7811	03-3291-8448
平 凡 社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町3-29	03-3230-6572	03-3230-6587
法政大学出版局 (休会中)		102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	03-5214-5540	03-5214-5542
み す ず 書 房	片桐幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	03-3814-0131	03-3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	03-3525-8460	03-3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	03-3813-9151	03-3812-3544

代表幹事 片桐幹夫

会計幹事 片山伸治

書記幹事 水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎吉岡 聡 ○段塚省吾 佐藤信治・郡司恵太・足立 佑・荻原弘和

調査・研修委員会 ◎森 卓巳 ○束原亮佑 河内秀憲

広報委員会 ◎乙子 智 ○本橋弘行 小林圭司

人文会ホームページ <https://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

見知らぬ人を認識する パレストナと語りについて

ハンマード パレストナの人を消さうとする語りをいかに解
体するか。文学から暴力に抗する。岡真理訳・解説 三三〇円

クロコダイルに魅せられて

福田雄介 オーストラリアの政府機関に、人生のすべてをワ
ニに捧げてきた男がいる。その半生を綴るエッセイ。二六〇円

つくられた日本の自然

大貫恵美子 始源の稲 万葉の四季 枯山水 文化的ナショナ
リズム、消費主義、自然という作為の人類学的研究。三〇〇円

トクヴィル選集

『アメリカのデモクラシー』の著者の論文、演説、旅行記、
書簡を収録。思想家の一卷本選集。富永茂樹編監訳 七〇〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷2-20-7 www.mszz.co.jp

公害の記憶をどう伝えるか

清水善仁著 「公害アーカイブズ」の視点 二七五〇円
四日市ぜんそくや水俣病などと向き合うためにいま必要なこと。

歴史文化ライブラリー

天皇家の存続と継承

中世の転換から現代へ
本郷恵子著 天皇を生み出す世襲と血統の経緯を解明。現代の
皇室が抱える課題にも触れ、今後の天皇家を展望。一九八〇円

大江戸怪談事情

『耳囊』の怪異をひもとく
堤邦彦著 現代の怪談文芸と都市伝説のルーツを読み解き、怪
異と隣り合わせに暮らす人びとの精神世界を描く。二〇九〇円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8 03-3813-9151 税込

人文書販売の手引き 第3版



- 哲学・思想
- 心理
- 宗教
- 歴史
- 社会学



https://jinbunkai.com/jb_contents/tebiki-3rd/

ミネルヴァ日本評伝選 最新刊

藤堂高虎

藤田達生 編著

——侍は討ち死に仕り候が本儀二候

豊臣家・徳川家の信頼厚き天下人の側近。新しい時代
を築いた異能の武將の軌跡を追う。 税込3080円

徳川家康

われ一人腹を切て、万民を助くべし

笠谷和比古著

税込3850円*好評3刷

明智光秀・秀満

ときハラあめが
下しる五月哉

小和田哲男著

税込2750円*好評4刷

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込/宅配可

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

資本主義にとって 倫理とは何か

ジョセフ・ヒース著／庭田よう子訳／瀧澤弘和解説 日常の道徳に反するかにみえる市場経済を正当化するものは何か。ヒース独自の「ビジネス倫理」が資本主義の可能性を明らかにする。◎3,520円

天使の哲学

中世哲学入門講義

石田隆太著 天使は中世版AI!? 身体なき完備な知性である天使に、中世はなぜ熱狂し、何を求めたのか——。中世哲学を「天使」で攻略する入門書。

◎2,640円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

映画をつくる新装版

その後の長いキャリアをも支え続けた、変わらぬ映画への思いとは。

『幸福の黄色いハンカチ』公開翌年の1978年に刊行された同名書籍の復刊。

動物の看護師さん奮闘記

動物たちの命と向き合う現場を愛玩動物看護師の視点で描くノンフィクション。

朝日新聞社Webメディア「sippoo」の連載を書籍化。

【著】保田明恵
【定価】1980円(税込)

【著】山田洋次
【定価】2200円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

奔放な生、 うつくしい実験

まつろわぬ黒い女たち、クエアで
ラディカルなものたちの親密な歴史

サイディヤ・ハートマン 著
榎本 空 訳／ハーン小路恭子 翻訳協力



生きることそのものを芸術とする、親密で奔放な彼女たちの物語。

税込3960円

けい ほう 草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshobo.co.jp>

【改訂版】

他人がこわい

あがり症・内気・社交恐怖の心理学

クリストフ・アンドレ、
パトリック・レジュロン、
アントワヌ・ペリッソ
高野優 監訳、
野田嘉秀 訳

田中裕子、

「会議で発言できない」「初対面の人と話せない」：

対人関係に強い恐怖を感じて生活に支障をきたす
〈社交不安症〉は日本ではうつ病の次に多い精神疾
患だが、治療法があることが一般に知られていない。
ロングセラーに新しい知見や治療法、SNSやコロナ
禍がもたらした影響を追加した改訂版！

▶ 税込2,640円

紀伊國屋書店 出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL 03(6910)0519

お坊さんになりたかった哲学者と 哲学者になりたかったお坊さん 「有^う時」を遊ぶ

藤田二照／中村昇

『正法眼蔵』のなかでも特に関心を集めてきた「有^う時」の巻について、曹洞宗の僧侶と『正法眼蔵』を読むためにいままで哲学を研究してきた(?)哲学者が対談。第一部では『正法眼蔵』との出会いなどについて対談し、第二部では実際に「有^う時」の巻を読んでいく。

2530円(税込)

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

AIは民主主義の敵か？

すべての人にとっての利益を考え、貢献するコミュニティのAIの開発およびその利用はいかにして可能か。

うたい、おどろき、たてる マーク・クーケルバーク
ありますとんび 木村奈緒 編

2640円

二〇〇年もゴングリートのピルを、みんなで一緒に建てた「祝祭のドキュメント」つくる喜びに満ちた、セクピルドの記録集。 3740円

「ソロ」という選択 ピーター・マクロウ

自分だけの特別な人生を築く
ひとりであることの喜び、社会性、充実感、そして規則にしばられない最高に幸せな人生の送りかたを伝授する。

3080円

青土社 東京神田神保町 ☎ 03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税込)

感覚・知覚心理学 ハンドブック 第三版

和氣典二・重野 純・村上郁也 編
『感覚・知覚心理学ハンドブック』の第三版が登場！これまでの研究から最新の知見まで、国内外の感覚・知覚研究を一冊に網羅。 57200円

自閉スペクトラムの 科学的支援に向けて

基礎研究と臨床応用の往還をめざして
日本心理学会 監修 米田英嗣 編 自閉スペクトラムに関する最新知見と支援の実践例を多領域の専門家が紹介。科学的理解に基づく効果的な支援を考える上で必読の書。 2090円

トラウマをめぐる10の神話

最新研究から解き明かす性格特性・レジリエンス・治療
ジョエル・パリス 著 黒田章史・市毛裕子 訳
トラウマ概念の漸動に警鐘を鳴らす著者が、膨大な研究結果からトラウマの誤解を解き、生物心理社会モデルによる理解と治療を示す。 2640円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBÔ 東京都文京区大塚 3-20-6

創元社

ネアンデルタール人 再発見

科学が再構築した
新しい人類史

D・パバギアーニ、マイケル・A・モース 著
篠田謙一「監訳」 武井摩利「訳」
A5判変型・上製・二五八頁・定価5280円

私たちのDNAにはネアンデルタール人の痕跡が一部残されている。彼らの文化・行動・遺伝子を通して「ヒトとは何か」を探る。

■二〇一五年アメリカ考古学協会図書賞を受賞

大阪市中央区淡路町4-3-6(税込)
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111